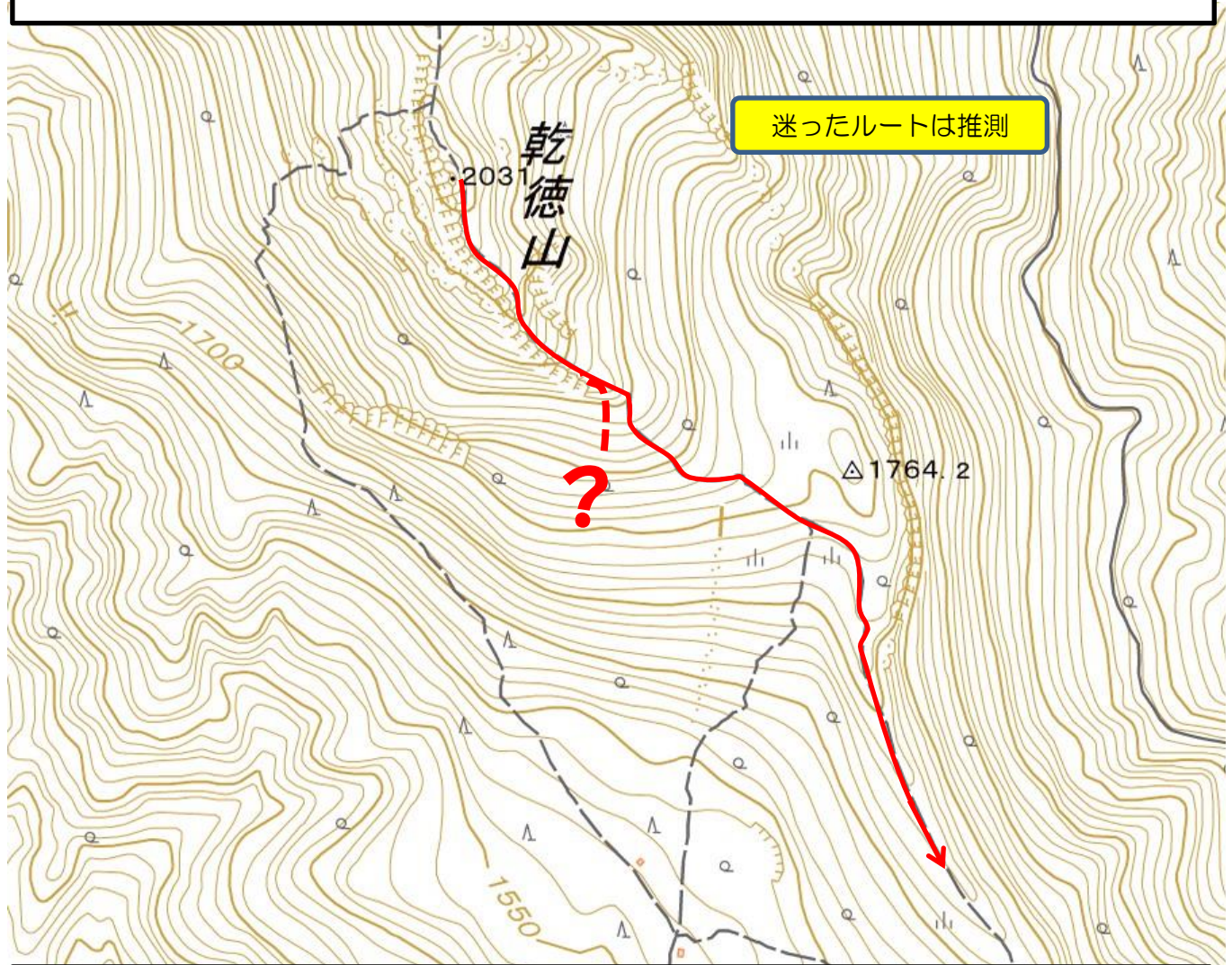


## 乾徳山道迷い(2014年5月)

赤テープを頼りに下山。途中で赤テープが無くなり焦る。バスの時間もあるのでこのまま下るか、最後の赤テープまで戻るか考える。最後の赤テープまで戻ることを決断し、正規ルートを発見し事なきを得た。



## 解説

「次の赤テープが確認できないのです。それでも、目の前の下りは間違いなくルートに見える状態だったので、赤テープを探しに下りつづけましたが、それが見つかりません。少しずつ不安がよぎるようになりました。最終バスまでそれほど余裕のある行程ではないという事が大きな判断材料になっていました。選択肢として ①、バス時間を考えるとこの下りにルートに賭けて降り続ける。②最後に見た赤テープのところに帰り、さらに山頂に戻り登ってきたルートで下るがバスは確実に間に合わない ③最後の赤テープの場所でもう一度次のテープを落ち着いて探す。まさかと思う事態になってきたという緊張感に包まれたできて、すでに30分以上「道迷い」状態になっていました。最悪の判断はバスの時間を考えて確信がない下りに賭けてそのまま進むか、でもこれは最悪は2時間たってもルートのたどり着けず「道迷いの遭難」に4時くらいになって救援要請を出す事態に陥ることで、これだけを避けようと思い、最後の赤テープ位置に戻ることにしました。」(HP参照)

「あれっ？おかしい？」と思った時の行動が運命を決める。「根拠が何もない」状態で下ることは遭難に繋がる。この事例の判断は、素晴らしい。こういった状況は、誰もが経験しているだろう。そして、この初期の行動が後で笑い話になるのか、遭難という話になるのか分かれ道になる。私自身も肝に銘じたい。